
ねとられ婚約者

秋生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねとられ婚約者

【Nコード】

N0229Y

【作者名】

秋生

【あらすじ】

巫女様が我が国にやってきて半年。

散々ボロクソに彼女をこき下ろしていた宰相様こと私の婚約者様が、先日とうとう陥落なさいました。と、言う噂。

底辺クオリティでたらたら更新中です。

01話 とつとつこの日がやってきました(前書き)

暇つぶしに流し読む感じで宜しくお願い致します。

11/3 少し修正しました。

01話 とつとつこの日がやってきました

我が国に、 所謂“巫女様”と呼ばれる異界の少女がやってきて半年。

その半年の間に、この世界の勢力図はガラツと変わった。

こちらにやって来たばかりの頃の巫女様は慣れない環境に戸惑うばかりの様でしたが、持ち前の前向きさと溢れんばかりの魔力、魅力で次第に周りと打ち解け始め。

仲間を引き連れ見事に『魔王から世界を救う』という偉業を達成されました。

ところがどっこい。

いつの間にか味方側だけではなく、敵であるはずの魔王までも魅了した我が巫女様の勢いは衰えを知らず。

当初から巫女巫女ウゼエと宣っていた性悪宰相様こと私の婚約者様も、先日とうとう陥落なされました と、言う噂。

直接本人に確認した訳ではありませんでしたが、ほぼ毎日来ていた昼時のランチにもぱったり顔を見せなくなり。

ついでに噂の内容が日々具体的となり真実味を帯びていくという状況は、否が応にもそれらが事実であると認めざる終えなくなるには十分でした。

つまり私は、巫女様に婚約者を寝取られた哀れな女という訳です。

と噂する常連さんを窘める。

本来、客が店内で何をしようとする自由なのが一般的な酒場のスタンスですが、ここは私の店なので言いたい事は言わせてもらっています。…何故だか、それが評判らしいというのが解せませんが。

いつもの如く反省の色が見えない常連さんの態度に溜め息を吐きながら、私は再びカウンターに座る宰相様に顔を向けました。

「本題に戻っていいか？ 水。」

「あ、はい。お待たせしました。 ちょっとまって下さい。」

そうして、私はカウンター越しに差し出されたコップにいつものレモン水を注ぎながら、淡々と今後の事務的な話をする宰相様の声を聞いていた。

ねえ、宰相様。貴方はいつも唯我独尊かつマイペースで、他人も婚約者もボロクソに仰る方でしたが、昔から変な所で律儀な方でしたね。

“好きな奴が出来た。婚約は破棄にする。”

…こんな城下町にある小さな酒場の女店主なんて、それだけ言っただけでバツサリ切ってしまったても可笑しくないのに。

悲しさよりも何故か嬉しさが勝って、私は思わずふにやりと笑ってしまいました。

それを見た宰相様が、眉を寄せかなり複雑な表情になられたとか、その後方にいる常連さんが私達の微妙な雰囲気にもた何かを企てていただとかは、その時の私はまだ、気付いていませんでした。

01話 とつとつこの日がやってきました(後書き)

らぶはないですが大人の階段は昇っている設定です。(お前)

02話 せいせい楽ませてください(前書き)

今回は酒場の常連さん視点です。

評価・お気に入りありがとうございます！

01話、若干加筆しています。(10/29 21時頃)

02話 せいぜい楽しませて下さい

《世界を救った巫女様争奪戦線についてあの冷徹非道な宰相・ジークフリートが参戦！更に泥沼化した王宮恋愛事情、果たして今後の展開は如何に》

なんて言うふざけた噂が流れ出だした数日後、噂のジークフリート様ご本人が婚約者のはずのシャロンの店 《酒場・オータムボーン》に現れた。

まあ酒場と言つても、実際は何だかんだで真面目でお上品な店主様のお人柄と、酒場に不似合いな家庭料理のお陰でかなりアットホームな店なんだがな。

と、話が逸れちまったが。そう、そのジークがシャロンの前に現れた。

で、いつものカウンター席に座り、いつも通りオムレツを注文し（因みに今は昼時だ。そして俺達が酒を呑んでいるのは夜勤上がりだからだ。断じてサボっている訳じゃない。）出来上がったオムレツを二、三口に入れた後に白紙云々のアレだ。

お前、せめて口にあるモン片してから喋ろよ　なんて呑気に二人を眺めていたら、段々雲行きが怪しくなってきた。

「…なあ、あの二人何か様子が変わじゃねえか？」

ポツリと呟いた一言に、隣のテーブルで賭がどうたらと喚いていた常連仲間どもが反応した。

「……………ん？」

「……………おお？」

「……………なあ、キース。ジークの奴もしかして…」

一斉にカウンターの様子を確認した三人。

此方からはシャロンの表情とジークの後ろ姿しか見えなかったが、伊達に長年此処に通っていただけにその違和感に直ぐに気付いた様だ。

「…何か理由アリみてえだな」

ニヤリと、まるで新しい玩具でも見つかった様に真後ろのロツジが呟く。

《酒場・オータムボーン》でシャロンが働く様になってそろそろ十年。

その間、明らかに慣れない仕事に戸惑うシャロンに罵詈雑言を浴びせながらもサポートしたり、場所が場所なだけに無遠慮にシャロンに言い寄ってくる野郎どもを陰ながら排除したり、させたりしていたのがあのジーク坊ちゃんだ。

件の巫女様は噂を聞く限り、民間人の俺達がドン引きたくなる程に魅力的だそうだが、それでもあのジークが墮ちる事がまず考えられないのだ。

…まあ、だからと言って俺達が“あの二人の為に”動く事はないんだが。

「せいぜい100ガネットの恨みを思い知るがいい…ククッ」

隣で凶悪な笑みを浮かべるアーノルドを見やり、同じく俺も口角が上がった。

俺達はただの客だ。

だが、あの二人の抱腹絶倒な茶番劇の観客かつエキストラでもある。

「よっしゃ、今回も盛り上げてこっぜ！」

こうして今日も、年若い男女二人は中年オッサン共の格好の酒の肴にされるのであった。

02話 せいぜい楽しませて下さい（後書き）

オッサン達、完全に状況を楽しんでいます。

毎回この調子でジークに絞められたりもしていますが、全然全く懲りる気はありません（笑）

03話 そろそろ我慢の限界です(前書き)

ラスボス登場編。ジーク視点です。

お気に入りありがとうございます…！

03話 そろそろ我慢の限界です

カランカラン

酒場にしちや少し洒落た音が店内に響く。…もう来やがったか。
胡乱な表情で入り口を見やれば、そこには予想通り魔女 いや、
“巫女様”が突っ立っていた。

「もう！ジークさん、こんな所で油売ってたんですか！部下さん達
が捜してますよっ。」

ウゼエ。

大体、“こんな所”たア聞き捨てならねえし、部下にしたって事前
にきちんと調整してんだから困る筈がないんだよ分かったかクソガ
キ などと正直な気持ちるぶちまけたい所だが、後々が面倒な
ので本音と建て前をすり替える。

「…ああ、それはすみません。」

「んもう…今まで何してたんですかッ!？」

お前は牛か。

魔女の言動一つ一つが目障りで潰したい衝動に駆られながらも、
自制する。

「もー、聞いてるんですかッ!?!ジークさん!」

ああウザイ、まじウザイ。

今まで何をしてたか？ んなもん見りゃ分かるだろう。

「…昼食を取っていただけです。」
チラリと、魔女に気付かれない様に動揺しているシャロンを見た後に、そう答えた。

「いつもいないと思ったたら…城内にも食堂はあるのに、わざわざ城下町まで出てるんですか？」

「城のメニューは味が合いませんので。」

城にはシャロンも居ないしな。

心の中でそう付け加えながら、俺は掬っていたオムレツを口に入れる。…クソ、クソガキの所為で冷めちまったじゃねーか。

「温めましょうか？」

「…頼む。」

思わず顔をしかめた俺に気付いたシャロンが気を効かす。

素直に頷いた俺からオムレツのプレートを受け取り、シャロンは小声で呪文を唱える。

「…火の魔法？」

「え？あ、はい…。」

しまった　　そう思った時にはもう遅い。

それまで存在すら認識していなかったであろうシャロンに、魔女が興味を持ってしまったのだった。

03話 そろそろ我慢の限界です（後書き）

ジークさんは結構大人気ない残念な人です。

04話 だんだん状況が見えてきました(前書き)

うおお、お気に入りには評価に感想までありがとう御座います…！
ご期待に添えられるかは分かりませんが、精一杯頑張らせて頂きます……！

今回はシャロンちゃん少々しょっぱい展開です。

04話 だんだん状況が見えてきました

婚約破棄の事務手続きの話をしていた最中に突然現れた“巫女様”。

初めはまさかの展開に、若干呆けてしまいましたがお二人の様子を見て、何となく状況が見えてきました。

「オイ、ジークの奴ブチギレ寸前じゃねえか」

「表面上にこやかな分、邪悪オーラの迫力まじ半端ねえ」

「それに気付いてねエとか、あの嬢ちゃんが本当に世界を救った巫女様なのか？」

外野、お黙りなさい。

例え本人が眼前でデメエ潰すぞオーラ全開な宰相様にしか意識が向いていないからって、お客様への誹謗中傷は私が許さん。

という視線をテーブル席の方へ向けると、常連さん方は片手を挙げ軽いノリで謝罪をしてくれました。…ですが、顔面がニヤケて崩壊しているという。

皆さん、完全に楽しんでらっしゃいますね…。

かく言う私は状況は見たものの、どう動くべきか決めあぐねていました。

あの一等級に自尊心のお高い宰相様が、正直空気が読めていらっしやらないこの巫女様に陥落したという噂が国中に出回っていると言っ事実。

どうやらただ事ではない何かが起こっているのは間違いありませんが、如何せん私はつい先程婚約“白紙”を言い渡された身。

つまり、宰相様は暫く自分に関わるなという事を伝えに来たのではないか　とは思つのですが、ついでに情性で続いていた没落女との関係を断ち切るうとなさっている可能性も捨てがたく。どうしたものかと、ふと宰相様を見やると何とも言い難い複雑な表情をされていて。

…ああ、オムレツが冷めて美味しくないけど、巫女様には猫を被っている手前、顔をしかめられない　という所でしょうか。

「温めましょうか？」

「……頼む。」

こういう事なら簡単に解るんだけどな　と思いながら、オムレツを温める呪文を唱えていると、宰相様の隣に立たれていた巫女様が息を呑む音が微かに聞こえました。

「…火の魔法？」

「え？あ、はい…。」

…しまった、思いも寄らぬ所で巫女様に認知されてしまいました。手前に座る宰相様も、思わずといった感じで顔をしかめています。…恐らく彼女と関わる事が最もタブーと思われる中で、目立つ様な真似をしでかしてしまった私は　それでも何とか切り抜けようと話を逸らす事にしました。

「お客様も何かご注文は御座いますか？」

「…えっ、あつ…ええと、お弁当があるから大丈夫ですっ」

…よし、逸れた。

思わずカウンターの所でガッツポーズ。

後ろの方で常連さん達もエア拍手で褒めて下さっています、が。

「すみません、お腹空いちやって…此方で食べちゃっても良いですか？」
そう言つて、あろう事か飲食店で巫女様は恥じらいつつも非常識な提案をなさいました。

…えっ、あの、いやもしかして巫女様の世界ではこれが常識なのでしょうが　　などと私が今度こそ思考停止に陥ったその時、口を開いたのはいつの間にかオムレツのプレートを空にした宰相様でした。

「マドカ様、此処は酒場です。飲食店で持参の弁当を広げるのは非常識です。」

「……あつ、……
めんなさい………」

『……』が多い。

…と、思わず宰相様のなツッコミを入れてしまいそうになりましたが、いやいや、今はそれよりも目の前の巫女様です。

どうやらこの方、精神的にまだまだ幼くいらっしやる様ですね。良く言えば純真無垢なのかもしれませんが、うっかり余所の酒場で似た様な話をした日には女だろうが容赦なく締められます。子供だからで済まされるのは10歳までですからね、この国は。

あ、でも巫女様ですから、何とかバリアーとかいっているので護られるから大丈夫なのでしょうか。まあ、どうでも良い話ですね。

そんな事をぼんやりと考えながら傍観していると、ポツリポツリと

巫女様が話し出しました。

「……そうですね…折角エリクさんに手伝ってもらって、一生懸命作ったので、ジークさんにも、と思つて持つてきたんですけど…、そうですね。迷惑、ですよね…：…本当にごめんなさい！」

と、巫女様。宰相様に向かって最敬礼で謝罪。

「オイオイ、ガチでジークしか見えねーぜあの嬢ちゃん。」

「思つた以上に盲進的だな。」

「しかし、エリクと言えばあの魔道騎士のエリクサマか？さり気なく男の名前出すなんざ、なかなかやるな。」

「しかも無自覚くせえし、ありやジークも相当振り回されてんな。」

「ひえー修羅場修羅場。」

ざわざわと、巫女様が来店なさる前とは打って変わって騒がしくなる店内。

…ギャラリーが増えているのは気のせいではないですね。

宰相様には申し訳ありませんでしたが、さり気なく修羅場なお二人から離れお客様の対応をしていると　突然、後方からドッと歓声が沸き上がりました。

何事かと振り返れば、そこには　無表情に淡々と巫女様のお弁当を召し上がる宰相様と、嬉しさのあまり泣き出しそんな巫女様のお姿がありました。

………勝手ではありませんが、今日の夜の営業はお休みさせて頂く事に、しました。

04話 だんだん状況が見えてきました(後書き)

婚約破棄か… ん？破棄ではなく白紙と言う事は…？ ジークさん
ナニシテンスカ、(＾p＾)ノ

と言う事で、巫女様ガチで寝取りにきたぜ！二段階ダメージは地味
にキツイぜ！…な巻でした。

ジークさんまじナニヤツテテンスカノ(＾o＾)ノ

05話 勝手に落ち込まないで下さい(前書き)

言い訳タイムその1

お気に入り・評価・感想ありがとうございます！
感想への返信は夜あたりに出来ればと思います。

05話 勝手に落ち込まないで下さい

巷で噂の巫女様が《酒場・オータムボーン》に現れたらしい
そんな噂を聞きつけて、今日のオータムボーンはいつも以上に盛況
でした。

普段は昼過ぎには一度店を閉めるのですが、今日は一向に客足が途
切れる気配がなく、結局収穫祭の日と同じ勢いで夕方近くまで営
業してしまいました。

…夜の営業を休みにして正確だったな。

「……ふう、」

わいわいがやがや、夕日が差し込む窓の向こう側から、帰路に就く
労働者達の話し声や荷車の音が聞こえてきます。

私は一つ、小さな息を吐くと、ぐいっと背筋を伸ばしました。

「んー：今日は働いたなー。」仕事が一段落した後の、この何とも
言えない気怠さが好きです。

今日は綺麗な夕日を見ながらだから、なお充実感があります。

十年前、母を亡くした直後から賭博に父が浸ってしまい、膨大に膨
れ上がった借金を返済するべく爵位も屋敷も領地も全てを売り払い、
この店で再スタートをきって。

初めは前店主の見習いで、慣れない仕事に戸惑いながら日々を過ご
していましたが、前店主を始め、今より少し荒くれ気味だった常
連さん方や更正した父、宰相様達に叱咤激励されながら何とかここ
までやってきました。

二年前、父と前店主が再婚を機に諸外国へ周遊しに旅立つ事になり

私がいきなり店主に抜擢された日には、『無理だミジンコレベルの
コイツにはまだ早い』と宰相様に散々ダメ出しを頂く事もありまし
たが。
それでも何とか踏ん張って、ようやく最近『自分の店』と言う自覚
が持てる様になりました。

「独り立ちの準備が出来たって事なのかな…。」
今は私以外誰もいない店のカウンター席から、ぼんやりと夕日を眺
めながらポツリと呟く。

そう。私も今年で27です。

何も知らない元貴族のお嬢さんな時期はとうに過ぎていきます。
何時までも宰相様や常連さん達の好意に甘えていては駄目なのです。

「これからは積極的に店を宣伝して…あ、他店との差別化も大事だ
な…それから…」
ポツリポツリとこれからの事を考えたままに呟きいて、ノートに記
す。

今は余計な事を考えたくなかった分熱中しすぎて、日が暮れる頃に
はカウンターのうえでうつ伏せになり意識を手放していました。

「……………い、……………おい…」

「……………ん…?」

ふと、誰かに呼ばれた気がして顔を上げる、と。

「やっと起きたか粗忽者。」

「!」

すっかり夜になり暗い店内で唯一、ゆらゆらと光るランプに照らされながら、相変わらずの無愛想顔で宰相様が此方を見ていらっしゃいました。

…カウンター越しに、先程までの私と向き合う形で顔を横にしていたらしく、思いのほか至近距離な事に驚いた私は先程よりも更に勢い良く仰け反りました。

「う、わ」

「あつ、バカ…」

ガッタン！と、椅子が倒れる音が店内に響きます。

私はというと、何とか近くのテーブルに掴まり負傷を免れる事が出来ました。

「……はあ、相変わらずドジだな。」

「……不可抗力です……。」
間近で徐々に宰相様のその整ったお顔を拝見して、心拍数を上げるなというのが難しいです。

「その椅子、俺の特等席なんだから丁重に扱えよな。」

「はい……。」

そう応えつつ、倒してしまった椅子を元に戻して、再び座ります。その頃には宰相様も身体を起こして、店主用の縦長椅子に姿勢正しく座っていらっしゃいました。

「ふふ、何だかいつもと立場が逆転してますね。」

「そうだな。」

「……………」

暫しの沈黙。

…それを破ったのは宰相様でした。

「悪かったな。」

「？」

「…今日、あの後。店、すげえ大変だったって聞いた。」
「……ああ、大丈夫です。もともと夜はお休みさせて頂く予定だったので、良い口実になりました。」
「そう軽い調子で答えながら、ふにやりと笑顔を作ってみせると、宰相様の無愛想顔が心配顔に切り替わりました。」
「……そうなのか？」
「はい。流石に噂の片鱗を見せ付けられた日くらいは、私だって落ち込みます。」

「誤解だ。」

ダン！…と、力強くカウンターを叩きながら、宰相様が真っ直ぐ私に視線をぶつける。

突然の変調に驚いた私にすまん、と小さく謝った後、ぶつぶつとこっつけ足されました。

「……いや、そう見せている部分は確かにあるが、好きでやってる訳じゃない。」

「ですが、口付けなされたと言う噂を聞きました。」

「あのガキがすっ転んだ拍子に、俺の頬に口が付いただけだ。」

「……一晩、共に明かされたと。」

「第三王子お手製の城の防犯用トラップとかいう訳の分からん装置に、巻沿いくらって閉じ込められていただけだ。因みに、今日の件については後で話す。……他にはどんな噂が？」

「いえ、もう結構です。」

「…じゃあもう怒る理由もないだろ。その宰相様呼びも止める。…今回は本当に、悪かった。」

「はい、ジーク様。」

そうして、私は呼称を元に戻しました。

本当は酒場に流れてきた噂は他にもまだまだ沢山ありましたが、

これだけ説明して頂ければ他も大体似た様なものと言う事くらいは想像つきます。

昼間の件で実はやはり と、噂を信じてしまいそうになりましたが、何やら事情があるという読みは外れていなかったみたいです。

「次は俺の番だな。」

呼称が戻った事で若干機嫌が治ったのか、ジーク様は先程よりも幾分落ち着いた様子で、今日に至までの経緯をお話し始めました。

05話 勝手に落ち込まないで下さい(後書き)

ジークさんはシャロンさんから宰相様呼びされるのが嫌いです。
ささやかな嫌がらせ大成功といった感じなシャロンさんでした。

次回はジークさんのターンです。

06話 勝手に抱え込まないで下さい(前書き)

言い訳タイムその2

いつの間にかお気に入りが入りが1300件を越えている…だと…？
本当に皆様ありがとうございます！

06話 勝手に抱え込まないで下さい

まずは話を整理しよう。

この国で現在、巫女様と呼ばれる少女は一人だ。名はマドカ。歳は17。異界人だ。

これはごく限られた人間しか知らない事実だが、彼女自身には何ら特殊な能力はない。

「え、でもよく噂で聞きますよ？巫女様は…ええと、『加護の力』で護られているから、攻撃魔法を受けても傷一つ付かないとか…。」

「巫女は24時間体制で魔道師団から遠隔で護られていただけだ。『では、『浄化の光』？で一瞬にして魔獣を跡形もなく消し去る話は…。」

「巫女一行にいた魔道騎士が、あたかも巫女がやったかのように見せかけただけだ。」

「……………」

何故、その様な面倒な事を？

珍しく顔をしかめ、そう尋ねたシャロンに対し俺は先程までよりも更に声を潜め、問いに答えた。

「彼女が、この国の贄となる為に喚ばれたからだ。」

そう、数十年に一度、異界から習慣的に喚ばれる巫女という存在。

それは、周期的に現れては魔獣を従え各国の領土侵略を行う様になる、“魔王”と呼ばれる後天的異能者を抹殺する為に呼ばれていた。

“後天的”と何故判るのかだって？

それは簡単だ。…過去に“魔王”と呼ばれた者達の身元は、その大

半がこの大陸の何れかの国に住む、ごく普通の国民だったのだ。

『“魔王”となる者は、誰もがある日突然覚醒する。そして“魔王”は覚醒する際、力が暴発するのかわず大きな爆発が起こる。』

それが、“魔王誕生”のサインだ。』

俺が宰相となった最初の夜、その話をしてくれたのは知識王と呼ばれていたこの国の前国王・フレデリックだった。

フレデリックは更に、この大陸に存在する、国のトップレベルでしか知らされていない暗黙のルールについても教えてくれた。

「“魔王”は“魔王を魔王たらしめんとした国”が排除する。」

「…え？」

「“魔王”ってのは、何かしら国に対して不満を持った人間がそうなるんだよ。」

つまり、自国民の責任は自分達で取れと言う事。

「……ああ、だから過去の討伐も毎回参加する国が異なっていたのですね。」

「金かかるしな。」

で、巫女様だ。

先程も言ったが、巫女は魔王抹殺の為の駒でしかない。

「何故、異界から喚ぶ必要があるのですか？」

「そこなんだが。」

まず過去の魔王討伐で分かった事だが、魔王は自らとその周囲

王座から謁見者を見下ろすまでの距離 に対して、結界を張ることが非常に多い。

「様々な手を尽くしたが、結構この世界の人間では結界を破る事は出来なかった。」

「…でも、異界の人間は違った？」

「その通りだ。」

細かい経緯は省くが、とにかく異界人ならば結界の先へ辿り着ける事が分かった。
となれば、そう。

後はその異界人を介して、魔王を抹殺するだけだ。

巫女と言うのは、元々はその為だけに喚ばれた存在だったのだ。

「……………」

シャロンの表情が曇る。

それを俺はあえて無視して、話を続ける。

「…と、いつもならそれだけで終わる筈だったんだが、今回はこれまでと様子が違う。」

まず、第一に魔王が生きている。…正気は取り戻しているみたいだが、こつした例は過去に一度もなかった。

次に、巫女が生きている事。これも、珍しいケースだ。

最後は周囲の人間の態度。これが一番厄介だった。

「魔王討伐に向かう時、周囲の人間は巫女に対してどういった接し方をすると思う?」

「……駒だという事に気付かれない様に…能力の件も伏せて、持ち上げる?」

「そうだ。今回も例に漏れず、出発前はそんな感じだった。」

だがしかし、戻ってきたらどうだ。

巫女に同行したメンバーは勿論の事、何故かついて来た魔王も、戻

つてきてから巫女と話した野郎どもまでもが 色ボケして全く
使い物にならなくなっていた。

「国民の税で食わせてもらってるのに、事ある毎に巫女様巫女
様……ああウザイ。仕事しろ花見なんて休日にしる働け馬鹿野郎ど
も。」

思い出したらまた殺意が沸いてきた。

「仕事に支障が出るレベル……それは、凄まじいですね。」

「ああ、だがそれだけじゃない。…奴ら、巫女にかまけてばかり
で、元いた恋人や婚約者にやフォローなんて事一切してなかったん
だよ。」

「それは…修羅場の香りが…。」

「全て俺と俺の部下が対処した。…既婚者への影響が少なかったの
が、せめてもの救いだな。」

当時の事を思うと、自然と目が遠くなった。

あの頃の俺は、シャロンのオムレッツがなかったら、気が狂って
何をやらかしていたか分からない。

「……ですが、ジーク様方は平気だったんですか？…その、例の噂
の様に、巫女様の魅力に陥落されたりは。」

「俺は見ての通り、墮ちてなんかねえが ウチも最近被害が出だ
した。…多分、巫女様が俺に目を付けて執務室に入り浸る様になっ
たからだろうな。」

「…。」

ピクリと、『入り浸る』と言う単語にシャロンが一瞬反応した
が、念押しするのは却って信じてくれているシャロンを疑う様な気
がしたため、自重する。

「大体の事情と状況は分かりました。…ですが、これでは逆に、ジーク様が巫女様に堕ちていないのが不思議です。何か、特殊な力が働いているのではないですか？」

「察しが良いな。」

「魔道騎士エリク様の婚約者様とは、今も交流がありますから。」

よくよく考えれば、エリク様も突然婚約者と音信不通となる様な不誠実な方ではありませんでしたね。」

…成程、そう言えばあのエリクの婚約者とシャロンは親友同士だったな。未だに交流があると言う事は、それこそ本物なのだろう。あちらの二人も中々事情は複雑そうだが 他の婚約者達が今は別の縁談を検討し始める中、エリクが元に戻るまで待つと言いきった彼女については、俺も驚いたものだった。

「…エリク達は今、呪詛にかかっている。 いや、正確には、呪詛にかかった巫女様にあてられている、と言った所か。」

「呪詛、ですか…あ、ひょっとして、ジーク様に影響が出なかったのは。」

「そう。恐らくコイツのお陰だ。」

コロんと、手の平に余裕で収まるそれをカウンターの上に転がす。

それは、シャロンの父が異国で見つけたと言う、呪詛除けの御守りだった。

「…父のお土産も、偶には役に立つのですね。」

真顔でそう言うシャロンに思わず吹き出しそうになったが、何とか持ちこたえて話を続ける。

「ああ、コイツのお陰で、ひとまず国全体が機能しなくなる事は免れた訳だ。…こないだ、お前の連絡鳥借りただろ。あれでダインのおっさんにコイツの詳細を聞いている所だ。」

「…そうだったのですか。…。」

そうして、シャロンが黙り込む。

右手を顎に当てるのは、彼女が考え事をする時のクセだ。

「現状、その御守り以外に打つ手は無いのですか？」

「いや、幾つか手は打ってある。…まあ、その中の一つが、昼間の俺が巫女の気を引き付けておく策だったんだが。……本当に悪かったな。」

「その件については、もう気にしていません。」きつぱりと言い切るシャロンの様子を窺う。…確かに、先程ほど思い詰めた雰囲気はなかった。

「…出来れば、私もジーク様のお力になりたいのですが……そもそも、この様な重要な話を一般人の私に話されて大丈夫なのでしょうか？」

と、伺うような視線でシャロンが尋ねる。

俺はカウンターに乗せられている彼女の左手に、自分の右手をそっとな重ねた。

「正直な話、この件に関してはシャロンに関わって欲しくない。だから初めは事情も話さず突き放そうとした。」

まあ、事態が尚更ややこしくなるだけだと思い返し（シャロンは控え目に見えてかなり行動的だ。勝手に動かれる方が怖い。）、早々に切り替えてしまった訳が。

「俺としては偶に、こうして話を聞いてくれるだけでも十分助かっているんだが　お前はそれじゃあ満足出来ないんだろ？」

「はい。だってジーク様、何でも一人で抱え込んでしまうんですもの。そんなの、私は嫌です。…お願いします、力にならせて下さい。」

そうして、俺の右手にシャロンの右手が重なる。…温かい。

「ああ。すまないが、宜しく頼む。」

「はい。」

そうして、シャロンは優しく微笑んだ。

…彼女の両手とその気持ちが温かく、ここ最近張り詰めていたものが解れていくのが分かる。

やはり、俺はシャロンじゃなきゃ駄目だ。

「因みに、お前はこんな話を聞いて良かったのか気にしているみたいだが　まあ、いずれ結婚するんだ。問題ないだろ。」

「婚約は白紙にするのではなかったのですか？」

「馬鹿、それはあくまで今回の件を解決する為だろ。俺はお前しか要らん。」

きつぱり言い切ると、シャロンは一瞬目を見開いて、先程よりも更に笑顔を綻ばせながらこう言った。

「私もジーク様じゃなきゃ嫌みたいです。好きです、ジーク様。」

「」

ゴン！

……あまりの事態に俺は動揺して、思わずカウンターの後ろにある調理棚で頭部を打った。

正直に言おう。

幼馴染み23年、婚約者を15年やって来た俺達だったが、互いの気持ちをハッキリと伝えた事は今まで一度たりとも無かった。

（流れて、そう言う行為に及ぶ事はまあ、そこそこあったが。）

明らかに挙動不審な俺に驚いていたシャロンが、はっと気付いた様に何う。

「ジーク様、大丈夫ですか？」

「……あ、ああ。」

明日から本当、頑張ろう　心の底からそう思った、その時。

「……ヨオーツスお二人さん！乳くり合ってつかーッ!?」「」「」

「……………」

タイミングを見計らったかの如く、
煩い連中が店内に入り込んで来
やがった。

06話 勝手に抱え込まないで下さい(後書き)

俺達の戦いはこれからだ!...と言う事で、本当は此処で終了する予定でしたが、もう少し頑張ってみる事にしました。

今しばらくお付き合い頂けると嬉しいです。

07話 執務室とジークと俺と（前書き）

秋生大好きオッサンのターンです。

語り口調が強いので、苦手な方はお気を付け下さい。

お気に入り1600件オーバーありがとう御座います…！！

言に、俺は思わず美声を執務棟に響かせてしまった。

…あ、ちよつとジークさん。虫螻見る目でこつち見んの止めて。オッサンコレでも結構繊細。

今のは俺が悪…いや、やつぱオメーが悪いわ。

「たく、シャロンにや何だかんだで紳士様（笑）なクセによ。」

「……………」

「いやもう、悪かった許せ辞典の角で狙うの止めれそれマジ痛い！」

「ホホ、宰相殿と紅蓮の狼殿は仲が宜しいですなあ…。」

ふと、ジークの隣に控えていた老人 確か、前宰相サマだったか

が、そう言いながら愉快そうに髭をさする。

あ、因みに紅蓮の狼つてのは俺ン事だ。この近辺じゃちったあ名の知れた傭兵だったりするんだぜ！

…と、いやいや、今はそんな事よか爺さんちよつと待てと言っただな。

「「「テメエの目は節穴か！」」」

「……………いやん。」

「「……………」」

爺さん類染めまじきもい。

俺の登場でざわついていた室内が一気に静まり返る。…皆、

どうやら気持ち同じらしい。

「はあ……………もう良い。キース、例の物はきちんと持って来たんだろ
うな。」

何とか持ち直したらしいジークから、今日俺が此処に来た本題の確認をされる。

「おつさ。俺ア、お遣いは得意だぜ。ちゃんと二つとも持って来て
んよ。」

と、俺はウエストポーチに突っ込んでいた物を取り出し、ジークの
前にぶら下げた。

シャロンの親父さんが仕入れたと言う、異国の呪詛除けの御守り。

何故、俺がそんなモンを持って宰相サマの執務室に現れたのかという、話は数日前の夜に遡る。

《三日前、酒場・オータムボーンにて》

「……巫女様が呪詛にかかっているだア？」

「ああ。」

昼間のド修羅場展開のその後　主に、意気消沈気味だった店主・シャロンの様子が気になって店に来ていた俺達は、店内で何やら深刻そうな話をしている二人に割り込むタイミングを逸し。

店の外から健気にもタイミングを見計らって突入した途端、ジークの野郎から一発ずつ拳骨をお見舞いされた。

人の恋路の邪魔なぞ、馬に蹴られてなんぼだぜ！

……で、これだ。

細かい経緯は知らないが、国内どこるか下手したら大陸中に広まっている一連の泥沼愛憎劇は、実は巫女様が魔王討伐時にかかった呪詛が原因らしい。

そこで、俺達にも力を貸して欲しいと。

「王宮中ってそんなにヤバいのか？」

「ああ。王族連中は全員アウトだし、騎士団もほぼ使い物にならねえ。議会は議会で回りやしねえし、ハッキリ言って最悪だ。」

思ったよりも深刻な状況に、誰一人として酒に酔えない。

「何でもつと早くに気付かなかつたんだ？」

「一番若いアーノルドが率直な疑問を投げる。確かに、こんな酷い事態になる前に防げた筈だ。」

「…誰もが疑う前にやられちまうんだよ。俺は俺で、目の前の問題ばかりに捕らわれすぎていたし。…直接巫女に関わりたくなくて逃げ回っていたのも、悪かった…。」

「はあ、と珍しくうなだれるジーク。その頭に、ふわりと気遣わし気にシャロンの手が乗る。」

「いつもなら口笛を吹きながらからかう所だが　　こんな調子じゃ、そんな気も起きなかつた。」

「まあ、過ぎちまつたモンはしゃーねエし。ジークもあんま抱え込むなや！」

「そーだそーだ、大事なものはこれからどうすつかだろ？」

「重い空気を払拭する様に、ギューンとロッジがジークを励ます。」

「今のジークは確かに宰相と言う職につき、同い年の連中よりも立派に仕事をこなしているかもしれないが、それでも俺達にとっちゃまだまだ餓鬼だ。」

「しかも俺達はコイツがまだ18の、今以上にクソ餓鬼だった頃から見えてきたんだ。…シャロン同様に、実の息子が弟かという位にはこのクソ餓鬼が可愛いと思っっている。」

「そんなジークが、人一倍高いプライドも捨てて助けを求めてきたんだ。応えてやるのがオトナってもんだろ！」

「と言う訳で、俺達はジークに協力する事にした。」

「酒場のシャロン、採鉱員のロッジとアーノルドは城下町でより多くの人から正確な情報を仕入れる情報担当に。」

「宮大工のギューンと傭兵の俺は王宮に出入り可能なため、それぞれ必要なタイミングで王宮入りし、役目を果たす。」

そうして、決められた役目を果たす為に、俺は今王宮に居るって訳だ。

因みに、ギューンの親父は今日は休みだ。

何せ呪詛除けの御守りは、ジークの分も含めて三つしかないからな。え？一つ余るじゃないかって？

まあその辺は、今からの俺のお遣いっぷりを見ていてくれって所だな！

「じゃー、俺ア今からサクツとだらしない騎士団の野郎共を鍛え直してくるわ。」

「ああ、頼む。あいつらも良い刺激になるだろう。　　そう言え

ば、今なら魔道騎士エリクも鍛練場に居るかもしれないな。」

「マジでかラッキー。久々にお手並み拝見とすっかな。」

そうして俺は後ろへ向き直し、片手を振りながら退室する。

パタンと閉じられた扉の向こう側で、ジークが凶悪な笑みを浮かべているのが何となく想像出来た。

「さて、鍛練場へ向かうか　　。」

そうして俺は、久々の王宮入りと言う事で若干の注目を浴びながら鍛練場を目指した。

ただっ広い王宮を寄り道もせず直進し、鍛練場の入り口まで辿り着いた、その時　　。

ドンッ！

「……………つてえええ……………」

突然開いた入り口から飛び出してきた男とぶつかった。

「…ッ！すまない、考え事をしていて……。」「
そうして、謝ってきたのは他でもない。つい先程ジークから話があったばかりの魔道騎士エリクだった。
…相変わらず全身真っ黒で、如何にも魔道騎士と言った風体してやがる。」

「いーっていーって。気にすんな！」

「！……貴方は、紅蓮の…そうか、宰相殿が言っていた講師とは貴方だったんですね。」「

「んな大したモンじゃねーって。お前さんはもう稽古済んだのか？」

「はい。…残念ながら、今から別件で移動しなければなりませんので。」「

「そりゃ残念だ。また今後手合わせしようぜ　あ、ちょっと待った。」「

「はい？」

慌ててその場を離れようとするエリクを、俺は引き止める。

「何か落ちてたぞ。」

お前さんのじゃねえ？」

「それは申し訳ない。」「

そうして俺は、《落とし物》を差し出されたエリクの手の平に乗せた。

「！」

ぶわっとエリクの体から、黒い霧が抜けていく。

「……っ、あ…私は……。」「

「はよーッさん、魔道騎士さん　調子はどうだ？」

王宮入りして半刻。

傭兵キースちゃん、お遣いと言う名のファーストミッション早速ク

リア。

……なあジーク、オッサンもなかなか捨てたもんじゃねエだろ？

07話 執務室とジークと俺と（後書き）

まさかのオッサンがチートキャラと言っ誰得展開の巻でした。
本当に誰得なんでしょうね（笑）

08話 店と親友と私と（前書き）

今回は比較的大人しめな展開です。多分。

お気に入り（1745件も…！）・評価・感想ありがとうございます！御座います！

08話 店と親友と私と

昼の営業を終え、休憩モードのオータムボーンにて。
久しぶりに会った親友は、綺麗な長い髪をバツサリと切り
ま
るで少年の様な格好をしていました。

「男として騎士団に乗り込んだ？」

「イエス！」

「どうしてそうなった。」

カウンター席で自信満々にVサインをかます親友の、その有り余る
行動力には思わず頭を抱える。…破天荒にも程があります。

「だってエリクの奴、一切事情説明にも来ないんだもん。殴り込み
に行きたくもなるよね。」

そう、私がジーク様とそうであった様に、彼女もまた魔道騎士
エリク様の婚約者です。…が。

「…そこで私に同意を求めないで下さい。伯爵が泣きますよ。」

「ああ、父上なら大丈夫！ブチ切れてほぼ冷戦中だから。」

「ああああ……」

何という泥沼。

巫女様は巫女様で、あの天然と言う言葉だけでは済まされない世間
知らずつぷりはやはり問題ですが 眼前で不敵に微笑む彼女の
場合はほぼ確信的犯行なので、余計に始末が悪いのです。

そんな彼女 レインは、うなだれる私の様子には気も止めず話を
続行する。

「そしたらエリクの奴速攻で気付きやがってね、」

ああ 伯爵様、申し訳御座いません。

彼女の口調が悪いのはもしかすると、もしかしなくとも私の店に通

い詰めた所為です　　等と、横道に逸れた事をぼんやりと思いつつ、彼女の言葉に耳を傾ける。

「何て言ったと思う？『貴女のような無鉄砲で後先考えず粗野な振る舞いをする女が居るから、巫女様の様な純真な御方が謂われのない誹謗中傷を受けるのです。』……だってさ！　　あ、今のモノマネ結構似てなかった？」

「似てません。」
ピシヤリと。

昔はどうあれ、今の彼女と私は貴族と平民。

本来であれば到底認められる態度ではありませんでしたが　　昔から変わらず、許されたままの親友と言うポジションに甘んじて、私は嘘偽りない心を伝えると。

だよねえ、とレインは何故か嬉しそうにふにやりと笑いました。

「……ですが、あの温和そうなエリク様がその様に辛辣な言葉を吐くとは意外ですね。」

一瞬、和やかな雰囲気の流れそうになりましたが、ひとまず話を本題に戻します。

今日彼女と会ったのは、雑談だけが目的ではありませんでした。

「いや、エリクはあれで結構腹黒いし、嫌いで無能な奴はバツサリ切るタイプの男だよ。　　まあ、本命にはベタ甘つてのは初めて知ったけど。キャラクター崩壊すぎて爆笑すんの抑えるのキツかったわ……。」

そう言って、ケタケタと笑う親友を私はじっと見つめる。

「……レイン、」
「……うん。呪詛の所為だ、ってその後君の旦那から聞いたけど、やっぱりキツかった。でも今回の件がなくても、いずれはきつとこうなっただと思う。」

それまでの　　正直伯爵令嬢としてはどうかと思うぶっ飛んだテン

シヨンから一転。

本来の彼女から漏れた言葉は、紛れもない本音でした。

…あ、因みに彼女の旦那云々の件については毎度の事なので、もう流す事になっています。はい。

此方の都合も勿論ありましたが　　つい先日まで、似た様な事を考えていた私としては、何とか彼女の力になりたい。

…私は改めて背筋をピンと伸ばす。

そして、目の前のレインを真っ直ぐ見つめ直してから、話を切り出しました。

「レイン、協力してもらいたい事があります。」

「うん。私もそのつもりで来た。…いや、“私達も”と言った方が正しいかもしれないけれど。」

「？」

此方の話を想定していたかのような彼女の反応に、一瞬傾げる。

そんな私の手前のカウンターに、一冊の冊子　一見する限りでは、何の変哲のない日記帳だ　が差し出された。

「……これ。私達　まあ所謂、今回の呪詛にしてやられたご令嬢達の情報網から仕入れてきた王宮の内情とか、そんなの。」

「……。」

私はその冊子を手に取り、パラパラとページを捲る。

交換日記形式で綴られたそれは、確かに彼女の言う通り、巫女様の行動パターンや呪詛にあてられた者のリスト、その他にも　　女性視点だからこそ見えてくる情報ばかりが記載されていました。

「……流石です。仕事が早い。」

「みんなノリだけは良いからね。…シャロンの事も気にしてたよ。」

「
」
いくら我が国が陽気でフランクな国とは言え、没落した家の人間を未だに気にかけてくれる方がジーク様やレイン、伯爵様以外にもいらっしやる事に私は軽く驚きました。

それと同時に　　まるで自分の事のように嬉しそうに報告してくれるレインに、心が温かくなるのを感じて。

ふと思うのでした。

国の贖となるべくして喚ばれた巫女様は、今のこの状況で果たして本当に幸せなのかと。

「……………」

「シャロン？」

考え込む私を怪訝そうに窺うレイン。

「…あ、すみません。何だか、嬉しくてつい惚けてしまっていました。」

「あはは、変なの。」

思った事をありのまま彼女に話す訳にもいかず、とっさに私は誤魔化していました。

「さて、私はそろそろ王宮に戻るよ。」

「……………まさか、騎士団にまた……………」

「まあね……………やっぱりさ、私は自分の目で直接確かめたいんだ。

大丈夫！前にダインの小父様から頂いた御守りも持ってるし……………

ね。」

「……………」

はあ、と私は溜め息を一つ吐く。

この破天荒な親友の願いには、昔から私も弱いのです。

「……………無茶だけはしないで下さいね。」

「りょーかい！」

せめてもの要望を伝え、元気に想い人のいる王宮へと駆け出す親友を見送る。

と、そこに入れ違いで一人の女性が店に入ってきました。

「レイン嬢は相変わらず元気だねえ。」

「エレノアさん。」

赤毛を後ろで一つに束ねた壮年の女性は、まるで事情を全て把握しているかの様に　いや、実際把握しているのであろう。

ともかく、行く末を見つめる様な、それでいて優しい眼差しで彼女はレインが去っていった方向を見つめていました。

「すみません、ロツジさんとアーノルドさんはまだ来てないんです。少し待っていて貰えますか？」

そうして、コップに入れたレモン水を差し出す。

「ああ、ありがとう。いつもの紅茶酒も貰えるかい？…あと、レイン嬢が置いていった“日記帳”も。今日はあんた達としか予定はないから、あたしや全然問題ないよ。」

「承りました。…やはりお見通しですね。今日は此方からのお誘いなので、サービスしときます。」

言いながら、私はエレノアさんへ“日記帳”を渡した。

「ありがとうございます。…まあ、情報屋つてのはそんなもんだからねえ。」

ああ、よく見てんじやないか、ご令嬢様方も。」

上機嫌にページを捲っていく彼女が、徐々に真剣な顔付きに変わる様子を見やりながら、今夜はきつと長くなる　私はそう、感じました。

08話 店と親友と私と（後書き）

普段のエリクさんとレインさんはお互い反発しつつも嫌いになれないとか、そんな感じなんでしょうね。（目茶苦茶他人事だな！）

なかなかサクサク進まずやきもきしますが、何とか乗り切りたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0229y/>

ねとられ婚約者

2011年11月5日06時04分発行